

労協連だより

「とてつもなく大きな、新しい何かが始まった」。史上最大規模の協同集会を終えて2週間たった今、希望と恐怖が寄せては引く波のように心を支配している。初日1200名余、2日目900名弱の参加者の多くが、「協同を拓く」ことへの希望と確信を深めたに違いない。長野の地を覆った2日間の「協同」は、まさにこれからの物語の種火にすぎない。その種火が、聖火のごとく県内・全国へと熱を伝道していく時、この集会が最大にして「最高」という称号を冠することになるだろう。しかし逆に、熱が冷めまた古い現実を引き戻されるならば、希望も熱も本物ではなかった、と問わざるを得ない。これは集会を準備してきた者たちの責任であり、その恐怖が私の心の中心にある。ともあれ、集会の内容は今後発行される報告集に譲り、その後の長野と全国での熱の伝導を記しておきたい。

集会翌日から、長野は休みなく真の成果を求めた挑戦が始まった。労協ながのが実質的には初めてといえる地域福祉事業所「宅幼老所みなせ」を開所した。続いてこの春には、集会の準備のさなかに引っ越した長野高齢協の新事務所1階に、「介護予防」を中心テーマにした事業所が新設される。これらの県内の取り組みは、地域的には伊那や松本、そして内容的には自治体との連携と若者の仕事おこし、そして食と農などを「長野モデル」として作る挑戦へと裾野を広げようとしている。県内に無数の協同労働が生まれ、仕事おこしが広がることを

古村伸宏（日本労協連・事務局長）ベースに、来春までに5団体の労協連への新規加盟を目標に、私の挑戦も粘っこく絡んでいる。

全国で、介護保険制度見直しの議論を受け、自治体が「介護予防」を中心課題にすえた高齢者福祉の予算・計画化を進めている。集会を前後して回った自治体とは、この点でかなり突っ込んだ意見交換ができた。今こそ介護予防を進める「理念」が必要な時だ。この理念を立てる上で、「市場化・民営化」と「協同化・市民化」を対置させ、介護保険の罪の部分进行を明らかにすることで、強力な説得力を持つ。この議論は、「新しい公共」とは何か、に通ずるものだ。この間の自治体行動でもまっすぐに受け止められる（受け止めざるをえない）100%の説得力だ。ともあれ理念を実践にどう表現するか、この提案・企画作りが急がれる。全国の実践は多様化しているし、介護予防の実践は急速に各方面で広がっている。これらを網羅し、コーディネートする戦略の中心は「人づくり」。ここに焦点を当て、地域の実情に根ざした介護予防プランを展開していくことで、また新たな成果が生まれることは間違いない。

また介護予防というテーマは、何よりも高齢協にとっての最大の追い風である。そしてその風を生かすためには、高齢協が「生協」から脱皮し、真の高齢協へと飛躍する志が不可欠である。自治体の共感もそのことで確かになると、長野の地で確信しつつある。この証明のために結果を出す、これが今

の宿題のひとつだ。また、全国でもトーンダウンしている、「高齢者の仕事おこし」に最も取り組んでいる高齢協、と評価していい長野で、この宿題の答えを急ぎたい。

さらに、NEETと呼ばれる若者の無業者層が問題になる中、ジョブカフェと組んだ取り組みが、長野で先進を拓こうとしている。こちらは自分がかかわってきた千葉ともクロスさせながら、成果を急ぎたい。

これらの成果の峰が見えているところは無数にある。しかし、その峰に向かって足が出ないところもまだある。その多くは「誰がやるのか？」という足踏みである。その問いに、決まって私はこう答えている。「実現し

ようとする夢は何なのか」「その夢をだれに語るのか？」ということから始まる戦略の必要性だ。市民の仕事おこしとは、文字通り全市民へメッセージを発して初めて一歩が始まる。今いる仲間のみでことをなそうとするなら、閉ざされた協同であり、労協設立の基本理念からも逸脱し、この運動の核心点を失う。「誰のための事業・運動なのか」「この組織は何のために存在するのか」。これらを問う段階から拓く段階へと移るとき、協同集会は「最高水準」の称号を手にする。その行方を握る神々と、未来の扉を開いて、新年を迎えたい。

研究所たより 研究所たより

「協同集会 in ながの」が無事終わり、通常の業務に戻りつつある今日この頃です。2年前の千葉集会とは、準備期間、実行委員会への参加者、集会参加者そして企画内容の充実度と、どれを取っても大きく上回る集会となりました。集会への評価は、参加していただいた方々がそれぞれに持ち帰っていただくしありませんが、実行委員会としての反省点等はこれから出し合っていくことになると思います。

それにしても、大きな集会になればなるほど裏方を務める人たちの仕事も膨大なものとなり、多くの人の献身なくしてはこのような集会は成し得ないと痛感します。労協ながの、長野県高齢協を中心として、各団体からお手伝いいただいた100名以上の当日要員の人たちは、雨が降る中の道案内や駐車場整

理、荷物運びから舞台設営、夜間の会場清掃など、ほとんど集会には参加できなかった人も多かったのではないかと思います。

「大勢の人間が力を合わせて働く = 協同」ということを改めて実感させてくれた長野集会でした。内容については、来月の『協同の発見』を協同集会報告集としますので、お楽しみに。

会員の田中夏子さんが10月に出版された『イタリア社会的経済の地域展開』（日本経済評論社）を協同総研で取り扱っています。すでに多くの方からご注文をいただいています。定価3,700円のところ会員価格として税+送料込で3,500円で販売いたしますので、ご関心のある方は協同総研までご連絡下さい。

No.6



ご協力者の皆様へ

拝啓 深秋の候 益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、いま「協同」を拓く2004全国集会 in ながの開催にあたりましては、格別のご支援を賜り誠にありがとうございました。

お陰様をもちまして、全体集会は約1200名、分科会は約800名の参加者をお迎えし、10回目の全国協同集会にふさわしい2000名の協同集会として成功裏に終了することができました。

昨年9月16日に「長野県非営利協同の懇談会」において長野での開催受け入れを確認し、世話人会や準備会を経て12月5日に実行委員会を発足させて準備を重ねて参りましたが、大成功を納めることができ、実行委員会一同、これまでご協力いただいた皆様や、当日ご参加いただいた皆様への感謝の気持ちと、成功までの過程を振り返り、達成感・充実感に満ち溢れております。

今回の協同集会は、都道府県の首長が初めて集会の一つの企画に参画いただくとともに、全自治体を訪問して協力を要請し、ほぼ県内全市からの後援を取り付けたこともあって、県や市町村の職員・議員さんが大勢参加し、公共を市民と行政が協同で担う新しい時代を象徴する協同集会となりました。

基調講演では、世界潮流における日本の進路を踏まえ、NPOや公のあるべき方向性を寺島実郎氏がお話され、多くの示唆と勇気を与えていただきました。

さらに、オープニングアクトにおける下諏訪町の御柱祭木遣り唄や、伊那のまつり創造集団結衆大地の獅子舞、プレ企画「協同の古代稲」を通じて共に集会をつくりあげてきた上山田大わらじ委員会の大わらじ神輿、さらにはリレー報告での住民との協同による健康づくりや食と農の地域づくり、仕事おこしのご報告、「信州・食のおもてなし館」における「笹ずし」「おやき」など信州の代表的な食文化と伝統を参加された皆様にご堪能いただくことができ、長野の集会として地元の特色をふんだんに取り入れて、ご参加いただいた皆様より評価の言葉や良

かったという感想をお寄せいただいております。

各分科会においては、会場がどこも満杯となり、幅広い団体からの実践報告に基づいて「協同」することがいかに重要であるかを熱く語り合い、短い時間の中でも具体的な討議が繰り広げられて、質的にも高い協同集会として評価される分科会になりました。

また、集会期間中を通じて呼びかけました「新潟県中越地震義援金」は、全体で250,275円となり、長野県を通じて現地の被災者にお届けする予定であります。

準備の過程では連絡不足などもあり、また集会当日も配慮にかけることが多々あったかと存じますが、至らなかった点につきましてはお詫び申し上げ、ご容赦願えれば幸いです。

さて、集会は終了となりましたが、集会を通じて多くの出会いや結びつきができ、長野の隅々に「協同」が具体的に位置付いていくことが、本当の成功になると実行委員会では当初より考えて参りました。この集会を通じてできたつながりを活かして「協同」の地域づくり・仕事おこしを進めて参りたいと考えておりますので、皆様方の変わらぬご支援、ご協力をお願い申し上げます。

本来ならば拝眉の上、御礼申し上げますところですが、略儀ながら書中をもちましてご報告と御礼のご挨拶とさせていただきます。

末筆ではございますが、季節柄、皆様のご健康とご多幸を祈念申し上げます。

敬具

平成16年11月 吉日

いま「協同」を拓く2004全国集会 in ながの
実行委員長 松島松翠